様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 4 月 20 日現在

研究種目：若手研究 B
研究期間：2006～2008
課題番号：18730388
研究課題名（和文）　高校・大学におけるフリーター志望者の早期発見手法及びフリーター志望抑制の説得手法
研究課題名（英文）　Early identification techniques about high school and university student's aspiration for freelance part time worker, and persuasive techniques which repress student's aspiration for freelance part time worker.

研究代表者
戸塚唯氏（TADASHI TOZUKA）
千葉科学大学・危機管理学部・講師
研究者番号：00363002

研究成果の概要：
高校生・大学生のフリーターに対する様々な意識を明らかにすることができた。特に、タイプ別（夢追い型・無目的型・不本意型）、年齢別にフリーターへの意識を測定したことによって、高校生・大学生の変化にとんだフリーター観を明らかにすることができた。また、脅威アピール手法、自己説得手法をもちいたフリーター抑止説得を検討し、特に脅威アピールが有用であることが明らかとなった。これらの知見は、高校・大学におけるよりよいキャリア指導の実現に貢献できるものと思われる。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	800,000	0	800,000
2007 年度	400,000	0	400,000
2008 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	1800,000	180,000	1980,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：心理学・社会心理学
キーワード：社会問題

１．研究開始当初の背景

研究開始当初、フリーターの増加が社会問題となっていた（現時点でも基本的にこの問題は解決されていない）。フリーターの増加によって税収の落ち込みが生じたり、いっそう少子化が進んだりすることが懸念されていた。また、若者自身にとっても、安易なフリーター選択は、後の経済的・心理的リスクに繋がる可能性があると思われた。

当時、政府もジョブカフェなどを設置し、フリーター対策に乗り出していたが、在学中の高校生・大学生のフリーター観の研究は十分でなく、フリーター（特に無目的型フリーター）を抑止するための説得手法の研究はなされていなかった。

２．研究の目的

高校生・大学生の職業的アイデンティティやフリーターに対する意識を多角的に収集検討して、高校生・大学生はフリーターのどのような点を魅力に思うのか（思わないのか）などを検討した。また、高校生・大学生

の中のフリーター志望者を発見するための指標として心理的リアクタンスの有用性を検討した。

さらに、フリーター志望抑制説得の手法として、説得研究の一領域として研究されてきた「脅威アピール手法」や自己生成的態度変容を生じさせる「自己説得技法」が有用であるかどうかを実験的に検討した。

３．研究の方法

調査および実験を行った。調査については、集合調査あるいはウェブ上の個別調査の様式で行った。実験については、被験者に文章刺激を与える形式の実験を集合的に行った。一部の実験は、1、2 週間のインターバルをはさんで複数回被験者の意識を測定した。なお、これらの調査実験の前には参加・不参加は被験者の自由であることを明確に伝え、事後にはデブリーフィングとして簡単な研究概略と結果を報告した。

４．研究成果

(1) フリーターに対する大学生の意識

大学生がフリーター一般に対してもつ意識を多角的に検討したところ、あまりよいイメージをもっていない者が多いことが明らかとなった。

次に、職業的アイデンティティと進路自己効力がフリーターへの印象に影響を与えているかどうかを検討するために、重回帰分析を行った（強制投入法）。独立変数は職業的アイデンティティ、進路自己効力、性であり、従属変数はフリーターへの印象であった。その結果、職業的アイデンティティ、進路自己効力、性の β 係数はどれも有意ではなく、$R2$ も.01 にすぎないことが明らかとなった。また従属変数を、「フリーターの魅力」、「フリーターでいることの恥ずかしさ」に変更した分析も行ったが、それぞれの $R2$ は順に.03、.02 にすぎなかった。これらの結果から、職業的アイデンティティや進路選択に関する自己効力はフリーターへの印象に影響しないことが示唆された。

また、補助的にリアクタンス特性とフリーターへの全体的印象（事前）の相関を検討したが、有意な結果は得られなかった。リアクタンス特性とフリーターという生き方の魅力（事前）についても同様であった。しかしリアクタンス特性とフリーター回避意図（事前）の相関係数を求めたところ、有意な相関係数が見いだされた（$r = -.30$, $p < .01$）。これはリアクタンス特性が高い被験者ほどフリーターを回避する意図が少ないことを示している。同様に、リアクタンス特性得点とフリーター選択意図（事前）の相関係数を求めたところ、こちらでも有意な相関係数が見いだされた（$r = .21$, $p < .05$）。これはリアクタンス特性が高い被験者ほどフリーターを選択する意図が大きいことを示しているといえる。

(2) 3 つのタイプのフリーターへの意識

フリーターを夢追い型、無目的型、不本意型に分類し、大学生がそれぞれのフリーターに対して、どの程度の好意をもっているかや、それぞれのフリーターの各属性（意志の強さ、コミュニケーション能力、人間関係能力、仕事能力）をどのように評価しているかを検討した。

まず、$\chi 2$ 検定・残差分析を行い、最も好感をもつ志望理由タイプを検討したところ、夢追い型が選択される傾向が強いことが明らかとなった。最も好感を持たない志望理由タイプとしては無目的型が選択される傾向が強かった。また意志の強さなどの諸属性について分散分析を行ったところ、ほとんどの項目で夢追い型フリーターが最も高い得点を得、無目的型が最も低い得点を得ていた。

さらに、年齢別フリーターへの印象を検討したところ、年齢が高いフリーターほど低い評価を得がちであることや、年齢が高くなるほど収入が高くなると推測されている（実際は必ずしも高くならない）ことなどが明らかとなった。

(3) フリーターに対する高校生の意識

高校生の 3 つのタイプのフリーターに対する意識を測定したところ、夢追い型フリーターが高く評価され、無目的型が低く評価されていることが明らかとなった。また、正社員として働いている人との比較を通してフリーターを評価させたところ、時間的余裕や心理的余裕、仕事内容の面でフリーターの方が高く評価されていることが明らかとなった。

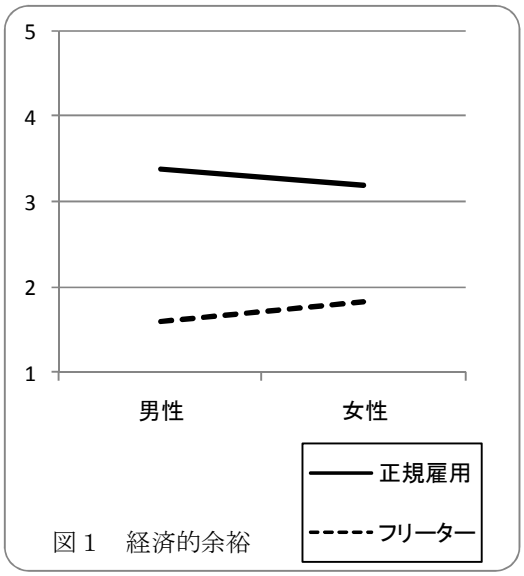

図１　経済的余裕

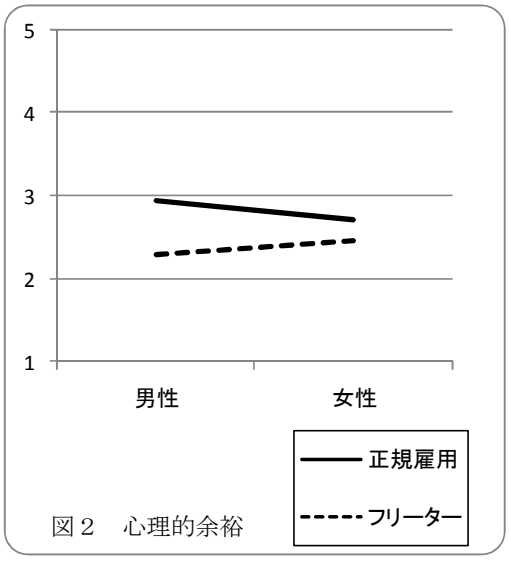

図２　心理的余裕

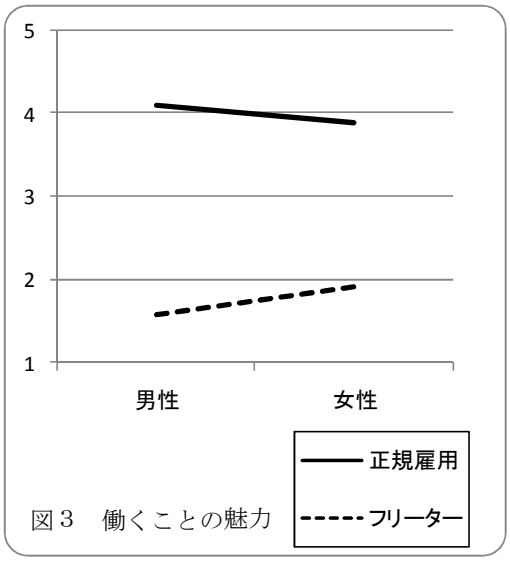

図３　働くことの魅力

ただし、経済的余裕と心理的余裕、働くことの魅力の項目においては交互作用が見いだされ、男性の被調査者よりも女性の被調査者の方で、正規雇用者とフリーターの間の差は小さいことが明らかとなった(図 1、図 2、図 3 を参照)。特に女性被調査者における心理的余裕については、正規雇用者とフリーターの得点の差が非常に小さく、興味深い結果であった。

(4) 脅威アピール手法の検討

フリーター回避説得において、脅威アピール手法と説得者の高圧的態度が説得効果に及ぼす影響を実験的に検討した。

その結果、フリーターへの印象（変化得点）については圧力の主効果が見いだされ、低圧力条件では唱導方向とは逆の方向へ被験者の態度が変化してしまった。この結果は当初の予想（低圧力条件でも高圧力条件ほどではないが唱導方向に態度が変化すると予想していた）に反していた。マイルドで控えめな説得文は、逆に被験者にフリーターの利点を想起させてしまうのかもしれない。効果的にフリーター回避の説得を行うのなら、ある程度毅然とした表現を用いるべきであることが示唆された。なおフリーターへの印象（変化得点）においては脅威の主効果は見いだされず、フリーターであることのリスク描写がフリーターへの印象を左右する可能性が低いことが明らかとなった。

一方、フリーター回避意図（変化得点）については脅威の主効果が見いだされた。大きな脅威を描写されるほどフリーターを回避したい意図が大きくなるという結果は解釈が容易である。説得を受ける前と後の変化はさほど大きいものでなかったが、それは本研究の被験者の職業選択に対する意識や労働に対する意識が高く、フリーター回避（事前）得点も比較的高かったことによると思われた（この研究の被調査者は資格志向の強い大学の学生であった）。職業選択や労働に対する意識の低い被験者を用いていたなら、より顕著な結果が見いだされていたのではないかと思われる。この結果によって、限定的ではあるものの、脅威アピール手法がフリーター回避説得において有用であることが示唆された。

(5) 自己説得技法の検討

自己説得とは「自分の態度と異なる内容の言動を行った後、その言動に沿った方向に態度が変容するようになること」であり、心理的リアクタンスの少ない自己生成的態度変容が期待できる説得手法である。若者に対する将来の生き方に関する説得は、若者からの強い反発が予想される。このような領域の説得においては自己説得技法が有用であろうと予想され、それを確認するために、実験研究を行った。

この研究ではある実験参加者にはフリーターの長所を、他の実験参加者には短所を考案してもらうよう頼み、その前後のフリーター回避意図を測定した。分析の結果、自己説得技法がフリーター回避説得に効果的だという確かな結果は見いだされなかったが、分散分析において部分的に有意傾向が見られるなど、潜在的な効果を示唆するような点が存在した。別の実験刺激を用いた場合にその効果が見いだされる可能性もあり、この点については今後再実験が必要であると思われた。

また、相関的にリアクタンス特性とフリーターへの意識を検討したところ、リアクタンス特性が高いほどフリーターへの評価が高いことが明らかとなった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計５件）

①戸塚唯氏　フリーター回避意図に及ぼす脅威アピール説得の効果　千葉科学大学紀要, 2, 1-7. 2009.　査読あり
（ http://www.lib.cis.ac.jp/lib/kiyou/k02-content.html）

②戸塚唯氏・狩野　勉・上北　彰　フリーターに対する高校生の意識　国際教育研究所紀要, 15-28. 査読なし

③戸塚唯氏・上北　彰・狩野　勉　フリーターへの意識に及ぼす自己説得技法の効果　国際教育研究所紀要,　19, 1-13. 査読なし

④戸塚唯氏　夢追い型、無目的型、不本意型のフリーターに対する大学生の態度　千葉科学大学紀要, 1, 81-88. 2008. 査読あり
（ http://www.lib.cis.ac.jp/lib/kiyou/k01-content.html）

⑤戸塚唯氏・狩野勉・上北彰　フリーターに対する大学生の意識　国際教育研究所紀要 17, 11-20. 2007. 査読なし

〔学会発表〕（計１件）
①戸塚唯氏　夢追い型、無目的型、不本意型のフリーターに対する大学生の意識　日本社会心理学会第 48 回大会（於：早稲田大学 2007/9/24）にて　日本社会心理学会第 48 回大会発表論文集，746-747.

６．研究組織
(1)研究代表者
　戸塚　唯氏（TADASHI TOZUKA）
　千葉科学大学・危機管理学部・講師
　研究者番号：00363002

(2)研究分担者
　なし

(3)連携研究者
　なし